

揺さぶられる正義

信じるのが先か、
疑うのが先か。

「揺さぶられっ子症候群」、多くの冤罪を生んだ“虐待”事件——
これは贖罪と覚悟の物語。

— 札幌弁護士会主催 上映&トークイベント開催 —

【日 時】 令和8年（2026年）11月7日（土）

12:30 開場 13:00 上映開始 15:30 トークイベント開始

【会 場】 アスティ45 16階（住所：札幌市中央区北4条西5丁目）

【登壇者】 上田 大輔 監督

秋田 真志 弁護士（大阪弁護士会）中山 博之 弁護士（札幌弁護士会）

【参加費】 無料

©2025カンテレ

主後2カ月の孫に暴行 祖母「救急車 呼ばなくていい」
主後1カ月長女虐待 母親に執行猶予付き有罪判決
7カ月の長男に傷害の疑い 母親逮捕

弁護士記者が長年の調査報道の末に描く、 唯一無二のドキュメンタリー



わたしたちのカラフルな色眼鏡が

「疑われる人」を「疑わせる人」に変えてしまう。
報道自体が、裁きを待つまでもないひとつの罰になっている現状に、
自分も加担しているのだと思ひ知らされた。
信じる側にも疑う側にもそれぞれの正義があり、
両者の狭間で細く上がる当事者の肉声を丁寧に掬い上げた
記者の真摯さも確かにひとつの正義だった。

——穂ミチ（小説家）

フィクションではたどりつけない頂。

上田監督の問いかけは、

引き裂かれた家族の姿を他人ごとでは終わらせない。
人が生まれ、育つことの重みに涙した。

——井上由美子（脚本家）

上田さんは面倒くさい記者だ。

警察や行政からの発表モノに従っていればいいのに、グレーに踏み込む。
悩みながら撮るので効率も悪い。煽らないから視聴率も取れない。
だから会社からも嫌われている（たぶん）。
でも、そんな人がいるから、

テレビはギリギリで踏みとどまれているのかもしれない。

「緒に働きたいか」といえば答えに詰まるが、

白黒つけず迷いながら取材対象に向き合う
同業者がまだいることにホッとする。

——土方宏史（東海テレビ、『さよならテレビ』監督）

無実の人を救う弁護士を志すも、有罪率99.8%の刑事司法の現実絶望し、企業内弁護士として関西テレビに入社した上田大輔。しかし、一度は背を向けた刑事司法の問題に向き合おうと記者になった。上田が記者1年目から取材を始めた「揺さぶられっ子症候群（Shaken Baby Syndrome）」。

通称SBS。2010年代、赤ちゃんを揺さぶって虐待したと疑われ、親などが逮捕・起訴される事件が相次ぎ、マスコミも報じてきた。
SBSは子ども虐待対応のための厚労省のマニュアルや診断ガイドにも掲載され、幼き命を守るという強い使命感を持って診断にあたる医師たち。その一方で、刑事弁護人と法学研究者たちによる「SBS検証プロジェクト」が立ち上がった。チームは無実を訴える被告と家族たちに寄り添い、事故や病気の可能性を徹底的に調べていく。虐待をなくす正義と冤罪をなくす正義が

激しく衝突し合っていた。やがて、無罪判決が続出する前代未聞の事態が巻き起こっていく。

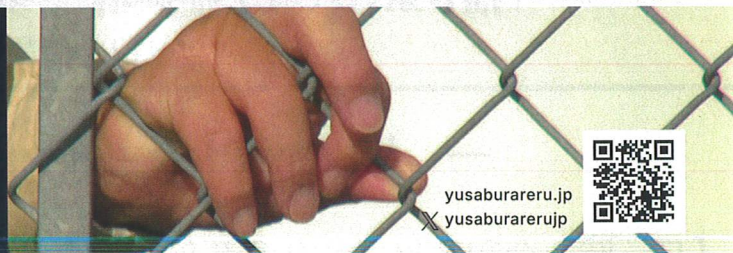
実名、顔を晒され、センセーショナルに報じられる刑事事件。逮捕報道に比べ、その後の裁判の扱いは小さい。無罪となっても一度貼られた“犯人”のレッテルはネット空間から消え去ることはなく、長期勾留によって奪われた時間も戻ってはこない。SBS事件の加害者とされた人や家族との対話を重ねた上田は、報じる側の暴力性を自覚しジレンマに苛まれながら、かれらの埋もれていた声を届け、司法とメディアのあり方を問う報道に挑む。そして、記者として何を信じるべきか、上田を最も揺さぶることになる人物と対峙することになる——。

自分にしかできない、と編み上げたこの映画は、贖罪と覚悟の物語だ。



揺さぶられっ子症候群とは？ [Shaken Baby Syndrome:SBS]

乳幼児の上半身を前後に激しく揺さぶることで頭部に強い回転性の外力が加わり、脳の中などに損傷が生じる症候群。当初は目立った外傷がないにもかかわらず乳幼児に硬膜下血腫が見られた場合の仮説だったが、3徴候（硬膜下血腫、脳浮腫、眼底出血）が揃えば、揺さぶりが原因である可能性が高いと診断されるようになった（「SBS理論」）。日本でSBSの症例が最初に紹介されたのは1990年代前半。2000年代後半からSBS理論の普及が進み、2010年代に入ってSBS事件での逮捕・起訴が急増した。現在では、揺さぶり以外の原因（たたきつけ等）を含む「虐待による頭部外傷」という用語が多く用いられるようになっている。



yusaburareru.jp
yusaburarerujp



日々流れるニュースのその先を、私たちは知らない。